文部省檢定濟

ELEMENTARY TEXT-BOOK
OF
MUSICAL GRAMMAR.

初等樂典教科書

山田源一郎
多梅稚 共著

東京 開成館藏版

檢定番号 一二〇

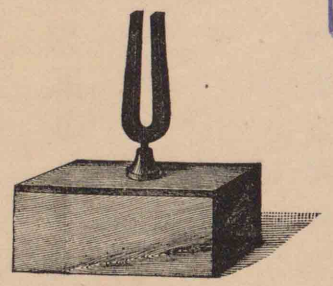
760 類
304 號
2373

41048
教科書文庫
4
760
51-1904
25000
14321

文部省檢定濟
明治三十七年三月六日　師範學校及高等女學校用

初等
樂典教科書

山多　田源　一梅　郎稚
共著



東京
關成館藏版

廣島師範學校藏書印
廣島師範學校藏書
縣第一二〇号
和音樂
一部一冊數
一
760類
304号
廣師(男)登錄番號
387登錄改正
第2373号
1432

例言

一　本書は師範學校及び高等女學校等の教科用にとて、中等教育の程度に據り、樂典の大要を教へ、普通西洋樂譜に用ふる諸記號を說きたるものなり。

二　本書は普通の樂譜を理會するに差支へなき限りは、敍述を平易簡略にし、引例の如きもその繁冗ならざらんことを力めたり。是れ一は教授する人に說明敷衍の餘地を存せんとての微意に出づ。

三　本書中の小字にて載せたる事項は、初學者にありては省畧

して可なるもの及び補註に屬すべきものなり。

四　本書は實地教授上の利便を計りて、科學的の敍述、排列を避くるに特に意を用ひたれども、なほ教授する人の前後相參照して、その必要により、任意に適宜の順序を採られんことを望む。

明治三十六年十一月

著者

廣島師範學校藏書印

目次

第一章　音名……一
第二章　音符……二
第一節　單純音符……三
第二節　附點音符……六
第三章　休止符……七
第四章　譜表及び音部記號……九
第一節　高音部譜表……一〇
第二節　低音部譜表……一三
第三節　大譜表……一五
第五章　變化記號及び本位記號……一七
第六章　拍子……二〇

第一節　二拍子……二二
第二節　四拍子……二三
第三節　三拍子……二四
第四節　六拍子……二四
第五節　正格及び變格小節……二五
第六節　變拍子及び切分音……二六
第七節　速度記號……二八
第七章　音階……三〇
第八章　長音階……三二
第一節　嬰種長音階……三四
第二節　變種長音階……三六
第九章　短音階……三九
第一節　嬰種短音階……四三

第二節　變種短音階……四七
第十章　半音階……五〇
第十一章　音程……五一
第一節　全音階的音程……五三
第二節　半音階的音程……五五
第三節　音程の轉回……五七
第四節　協和及び不協和音程……五八
第十二章　發相記號……六〇
第一節　强弱に關する發相記號……六〇
第二節　曲想に關する發相記號……六一
第三節　雜記號……六三
第十三章　省畧記號……六四
第一節　小節に關する省畧記號……六五

第二節　音符に關する省畧記號……六六
第十四章　裝飾記號……六七
第十五章　雅樂調音階……七一
第一節　呂旋法……七二
第二節　律旋法……七三
第十六章　壹越調律旋……七三
第一節　順八逆六……七四
第二節　順六逆八……七六
附音樂術語集

初等

樂典教科書

山田源一郎
多梅稚　共著

音とは發音物體の他物の衝擊をうけて顫動し、空氣の媒介によりて吾人の聽官に達するものを云ふ。

音に樂音と噪音との二種あり。樂音とは一定時に一定の顫動をなすものにして吾人の聽きて愉快に感ずるものを云ひ、噪音とは一定時に不定の顫動をなすものにして、吾人の聽き

第一章　音名

一。音樂上に用ふる聲音は、其數多けれども、性質の異なるは唯七音のみなり。されば音樂上に用ふる數多の聲音は、全く此七音を反復重用せるものに外ならざるなり。

二。音は「イロハ」歌の首句、七文字を以て其名稱とす。之を名づけて**音名**と云ふ。

音名　**ト　ヘ　ホ　ニ　ハ　ロ　イ**

て不快の感を起すものを云ふ。故に音樂上に用ふる音は總て樂音なりと知るべし。

音名に「イロハ」の七文字を用ひたるは英國の「アルハベット」の首句七文字に準へたるものなり。

英國　G F E D C B A
獨乙　G F E D C H A
（ゲー エフ エー デー チェー ハー アー）

三。此七音は何れも其高度を異にす。其各二音間の距離を**音程**と云ひ、音程に廣狹の二種あり。

（イ）。**ト・ヘ　ホ・ニ・ハ　ロ・イ・**（ト。）

四。右の表中、最上と最下とにある（イ）と（ト。）とは、何れも上或は下に反復せられたるものなれば、元のものと區別せんがために、上部に反復せられたるものには、上部に一點を附し、下部に反復せられたるものには、下部に一點を附せるなり。而して中間に黑點を有せる二音間の音程は、黑點を有せざるものゝ二倍とす。此廣き二音間は、**全音程**又は一音程と云ひ、狹き二音間は**半音程**と云ふ。

全音程　イ—ロ　ハ—ニ　ニ—ホ　ヘ—ト　ト—イ

半音程　ロ—ハ　ホ—ヘ

第二章　音符

一。音を表すには、**音符**と名づくる記號を用ひ、之を譜表と名づくる五線上 ≡ に排記して、其高低を表す。

二。音符は音を表すと共に其長短をも表すものにして、音の長短は形狀を異にせる音符を以て之を表す。

三。音符に**單純音符**と**附點音符**との二種あり。

第一節　單純音符

一。單純音符には六種あり。其形狀及び名稱は左の如し。

(1)　𝅝　全音符　四拍

(2) **二分音符**　二拍

(3) **四分音符**　一拍

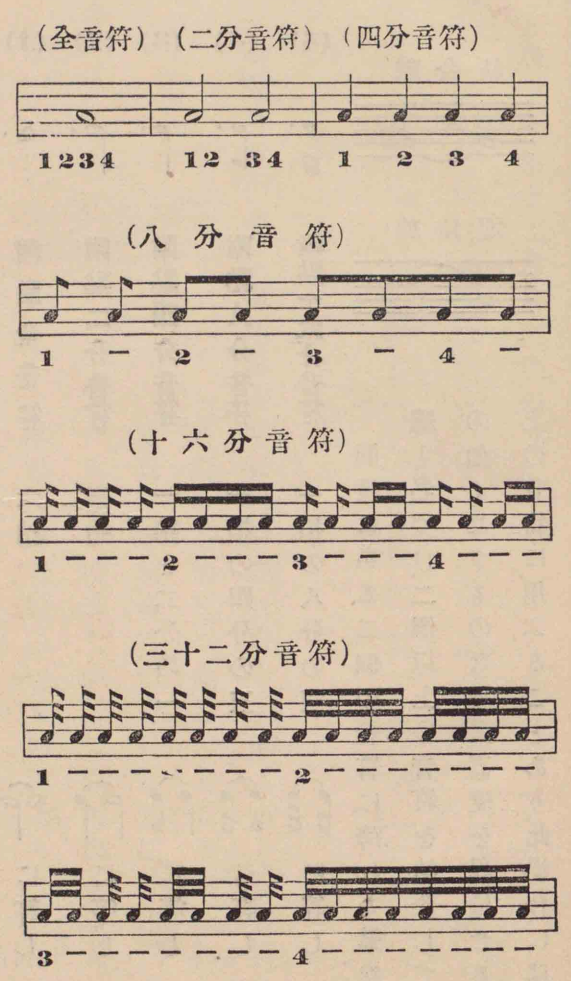
(4) **八分音符**　一拍の二分の一

(5) **十六分音符**　一拍の四分の一

(6) **三十二分音符**　一拍の八分の一

二。音符の白楕圓及び黑楕圓を**符頭**と云ひ、符頭より出づる縱線を**符尾**と云ふ。而して八分音符以下の音符の有せる斜線は、之を**鈎**と云ふ。

三。各音符の音長の比は、何れも二分の一とす。而して音の長短は、拍數を以て計ふるものなれば、全音符を四拍の間、保つものとすれば、二分音符は二拍、四分音符は一拍等、順次折半せる拍數を有するものなり。



符尾は上向するも下向するも異なることなし。然れども符頭、譜表の上部にあるときは下向し、下部にあるときは上向するを常とす。これ記譜上、體裁良きを以てなり。

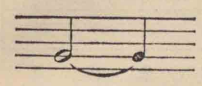
八分音符以下の音符には、或る場合に二個以上の鈎を結合して用ふることあり。然れども其音長は少しも變化せざるものとす。

第二節　附點音符

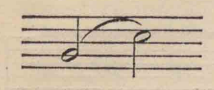
一。附點音符とは、單純音符の右傍に一點を附したるものにして、左の五種あり。

(1) 附點全音符　六拍　に等し。
(2) 附點二分音符　三拍　に等し。
(3) 附點四分音符　一拍と二分の一　に等し。
(4) 附點八分音符　一拍の四分の三　に等し。
(5) 附點十六分音符　一拍の八分の三　に等し。

結合線



連結線



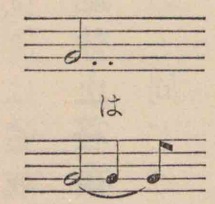
同度にある二個の音符に跨れる弧線は、**結合線**と名づけ、二個以上の音符を結合して一音符の如くなすものなり。又高度を異にせる二個以上の音符に用ふることあり。此場合には**連結線**

と名づく(第十二章第三節參照)。

二。附點の音長は、單純音符の音長の二分の一とす。故に附點音符の音長は、單純音符の音長に其二分の一を加へたるものに等しきものとす。

附點音符の他に**複附點音符**(又、再附點音符とも云ふ)あり。此音符は單純音符の右傍に、二點を附したるものにして、其音長は單純音符の音長に、其四分の三を加へたるものに等し。而して複附點全音符より複附點八分音符に至る四種あり。

複附點二分音符



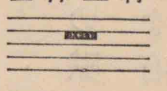
第三章　休止符

一。音の默止を表す記號を**休止符**と稱し、音符と同一なる種類を有す。左の如し。

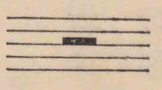
休止符のことを近來種々なる理由のもとに其名稱を不適當なりとし、默

符と改稱したる書あれども、本書は在來の名稱を襲用したり。故に學習者は同物異名のものなりと知るべし。

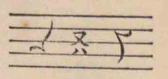
全休止符



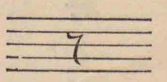
二分休止符



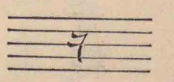
四分休止符



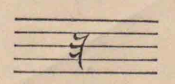
八分休止符



十六分休止符



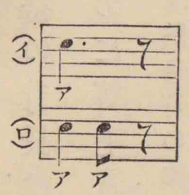
卅二分休止符



二。以上の六種を**單純休止符**と云ふ。而して譜表上に記譜する位置は體裁上、右圖の如く一定せるものとす。

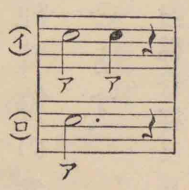
三。**附點休止符**、**複附點休止符**等は、其組織全く音符に於けるものと同じければ、略す。

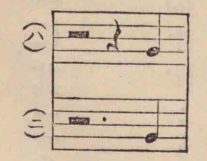
音符

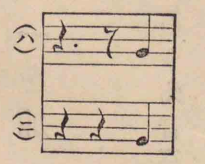


音符は附點音符の拍數を以て、單純音符の拍數に代用すること能はず、これ其奏法を異にするを以てなり。例へば(イ)を(ロ)に代用すること能はざ

休止符





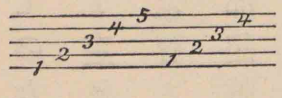


るが如し。然れども休止符にては便宜上、何れに代用すとも奏法に變化を及ぼすことなし。例へば(ハ)を(ニ)に代用するを得るが如し。

第四章　譜表及び音部記號

一。音の高低を表すには、五條の並行横線を用ふ。之を**譜表**と云ひ、線と間と共に用ふ。其名稱左の如し。

表譜



線の名稱（第一線、第二線、第三線、第四線、第五線、）

間の名稱（第一間、第二間、第三間、第四間、）

二。譜表の線及び間は何れも之を**一度**と云ふ。故に譜表は九度の位置を有するものとす。

三。譜表上に、七音の位置を定めんがために、譜表の首に**音部**

記號(又、音度記號とも云ふ)と云ふものを附記す。

四。音部記號とは、七音中の某音を代表して、譜表上に附記するものなれば、此記號の置かれたる位置は、卽ち某音の位置と定め、他の各音の位置は、皆それより上或は下に計へて定むるものとす。

五。音部記號には左の二種あり。

(1) **高音部記號**(一名**ト字記號**)

(2) **低音部記號**(一名**ヘ字記號**)

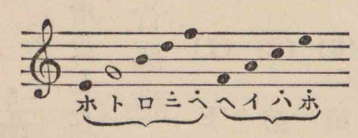
この他、**中音部記號**(一名**ハ字記號**) と稱するものあれども、普通音樂に用ふることなし。

第一節　高音部譜表

單音唱歌に用ふる樂譜は重に此高音部譜表を用ふるを通例とす。

一。高音部記號は、音名**ト**を代表するものにして、譜表の第二線に置く。此記號を有せる譜表は、高音を表すに用ひらるを以て、之を**高音部譜表**と名づく。

高音部譜表

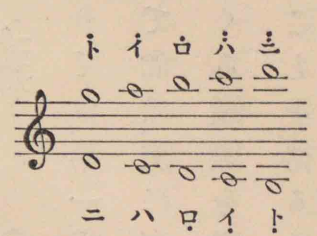


線の音名　**ホ・ト・ロ・ニ・ヘ**

間の音名　**ヘ・イ・ハ・ホ**

二。譜表の五線、四間の他に、尙ほ上下に位置を要するときは、上部にありては、第五線の上の間を用ひ、之を**ト**音の位置とす。又下部にありては、第一線の下の間を用ひ、之を**ニ**音の位置とす。而して尙ほ、更に高低諸音の位置を要するときは、加線と名づくる短線を附記して、順次に線と間とを交互に增設することを得るものなり。

増設したる位置



増設したる位置は、上部は上方へ、下部は下方へ計ふるものなり。

三。高音部譜表上、半音程の位置は左の如し。

(1) 下第二間と下第一線との間　ロ・—ハ
(2) 第一線と第一間との間　ホ—ヘ
(3) 第三線と第三間との間　ロ—ハ
(4) 第四間と第五線との間　ホ—ヘ
(5) 上第二間と上第二線との間　ロ—ハ

此他の線間の間は、何れも全音程なりと知るべし。

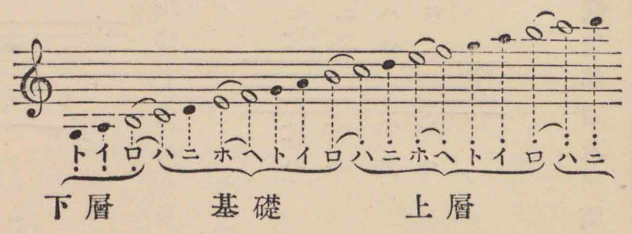
上部線、間の名稱

- ト上第一間。イ上第一線。
- ロ上第二間。ハ上第二線。
- ニ上第三間。

下部線、間の名稱

- ニ下第一間。ハ下第一線。
- ロ下第二間。イ下第二線。
- ト下第三間。

高音部譜表にある諸音の一列



基礎、上層及び下層の七音を區別せんがために、**基礎七音**を無點とし、**上七層音**には音名の上部に一點を、**下七層音**には其下部に一點を附したり。然れども泰西の書には、茲に基礎音として說ける無點の七音は上部に一點を有するものとして說けり。今學習者の疑を防がんがために、之を附記す。

上層より尙ほ、上に重なりたるものか、或は下層より尙ほ下に重なりたるものには、二重點を附するものと知るべし。

第二節　低音部譜表

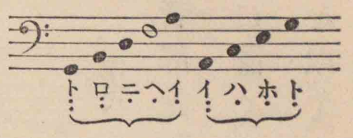
一。低音部記號は、音名**ヘ**・を代表するものにして、譜表の第四線に置く。此記號を有せる譜表は、低音を表すに用ひらるを以て、之を**低音部譜表**と名づく。

線の音名　ト・ロ・ニ・ヘ・イ・

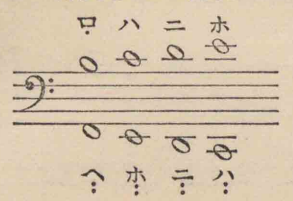
間の音名　イ・ハ・ホ・ト・

二。低音部譜表にありても、亦高音部譜表に於けると同一の方法によりて、位置を増設することを得。

低音部譜表



増設したる位置



増設したる線及び間の名稱は、高音部譜表に於けるものと同じ。

三。低音部譜表上、半音程の位置は左の如し。

(1) 下第一線と下第一間との間　ホ…ヘ…

(2) 第二線と第二間との間　ロ…ハ・

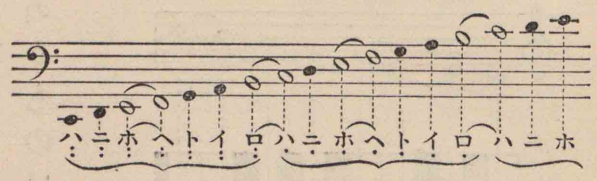
(3) 第三間と第四線との間　ホ…ヘ・

(4) 上第一間と上第一線との間　ロ…ハ

此他の線間の間は何れも全音程なりと知るべし。

低音部譜表の第四間ト・より上第二線ホに至る六音は、高音部譜表の下第三間ト・より第一線ホに至る六音と、全く同一なる音なりとす。これに由りて高低兩音部譜表の關係を知るを得べし。

低音部譜表にある諸音の一列

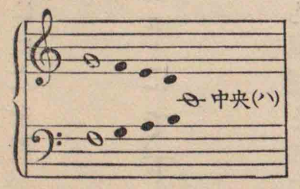


第三節　大譜表

一。有鍵樂器（風琴洋琴）に用ふる樂譜を記せんには、前に說きたる高低兩音部譜表の關係により、中央にハ音（高音部譜表の下第一線低音部譜表の上第一線）を夾みて兩譜表を重ね、縱線と鈎線とを以て、二個を結合したる譜表を用ふ。之を**大譜表**と云ふ。

兩譜表の中間にあるハ音を稱して、中央のハ

大譜表



音と云ふ。此ハ音の位置の加線は煩を避けんがために、常には之を置かず、唯必要に應じて臨時に設くるものとす。

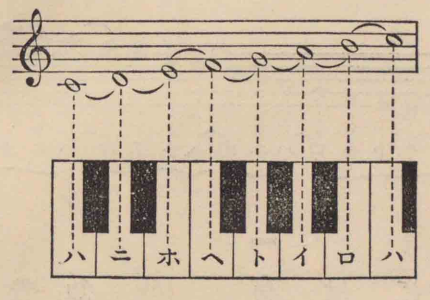
二。有鍵樂器にては、上部の譜表にある音符は右手にて、下部にあるものは左手にて奏するを通例とす。

有鍵樂器の鍵盤には、白鍵と黑鍵との二種あり。卽ち白鍵は前面に齒列し、黑鍵は二個又は三個づゝの集合にて交互に配列せり。

二個の白鍵の中間に黑鍵を有せる二音間は、全音程にして、黑鍵を有せざる二音間は何れも半音程なりとす。

黑鍵は左側の白鍵の半音程高き音ともなり、又右側の白鍵の半音程低き音ともなるものなり。故に七音を十二個の半音程として區別することを得べし（第十章參照）。

譜表と鍵盤との關係



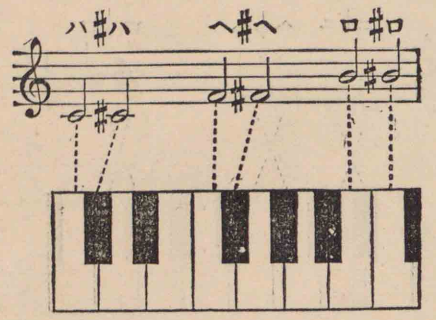
嬰、變の記號は調號として用ふる場合と、臨時記號として用ふる場合との二あり。臨時記號とは小學唱歌集「國の板戸」の曲の中途にある嬰記號の如きものにして、樂曲の中途に臨時に用ふるものを云ふ。調號としての場合は第八章第一節に說けり。

第五章　變化記號及び本位記號

一。有鍵樂器の白鍵の音を**本位音**と云ひ、黑鍵の音を**嬰音**又は**變音**と云ふ。

二。**嬰記號**♯とは、或る音の高度を、半音高くせんとするときに用ふるものにして、其高くせんとする音符の左側に附記し、白鍵の右に接せる黑鍵を用ふ。

嬰音

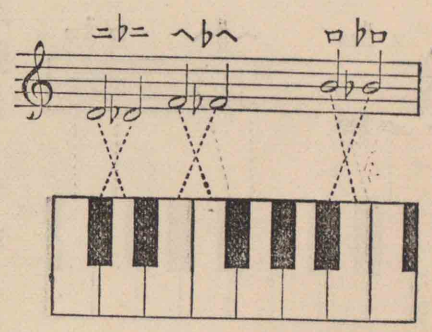


嬰ハ（ハ♯）、**嬰ニ**（ニ♯）、**嬰ホ**（ホ♯）、**嬰ヘ**（ヘ♯）、**嬰ト**（ト♯）、**嬰イ**（イ♯）、**嬰ロ**（ロ♯）、

嬰ホ、**嬰ロ**の二音は、右側の白鍵を黑鍵の代に用ふ。

三。變記號 ♭ とは、或る音の高度を、半音低くせんとするときに用ふるものにして、其低くせんとする音符の左側に附記し、白鍵の左に接する黒鍵を用ふ。

變音



變ハ(ハ♭)、變ロ(ロ♭)、變イ(イ♭)、變ト(ト♭)、變ヘ(ヘ♭)、變ホ(ホ♭)、變ニ(ニ♭)、

變ハ、變ヘの二音は、左側の白鍵を黒鍵の代に用ふ。

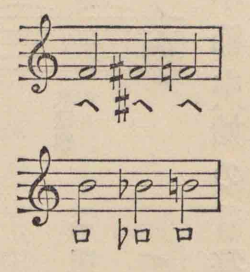
四。變化記號の效力は、何れも一小節(第六章參照)内の同音に及ぼすものとす。

五。變化記號によりて上下せられたる音を、原位に復せしめんとするときは、**本位記號** ♮ と名づくる記號を、其復せしめんとする音符の左側に附記す。

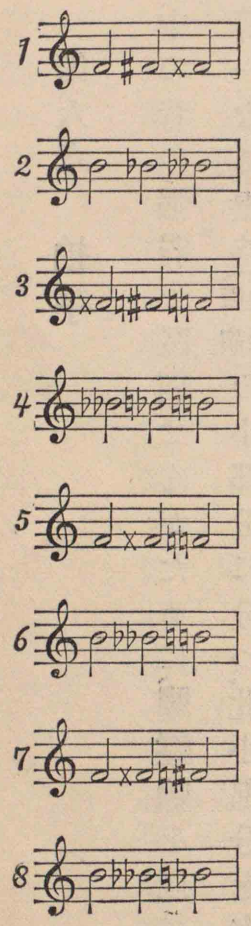
一旦嬰音となりたる音を、更に半音高くせんとするときは、**重嬰** X の記號を用ひ、一旦變音となりたる音を、更に半音低くせんとするときは、**重變** ♭♭ の記號を用ふ。而して重嬰變の音を、單嬰變の音となさんには、♯♯ 又は ♮♭ の記號を用ひ、全く本位の音となさんには、何れも ♮♮ の記號を用ふ。

重嬰變の音は、何れも本位音より單嬰變の音を經ずして、直に重嬰變の音となし、又單嬰變の音を經ずして、直に本位音となすことを得。

音位本



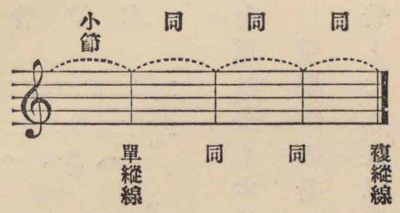
音變嬰重



第六章　拍子

一。樂曲中の音の強弱を區別せんがために、**單縱線**を以て何れも等一なる歷時（所謂拍數）の小部分に分つ。此小部分を名づけて**小節**と云ふ。

單縱線に對して、**複縱線**と名づくるものあり。これは重に樂曲の結尾に用ふるものなれども、又樂曲中一部の段落を示すときにも用ふ。



二。單縱線の右にある音符は、常に**强聲**にして、左にある音符は常に**弱聲**なりとす。故に小節中、始の音符は强聲にして、終の音符は弱聲なりと知るべし。

三。小節は、全く音の强弱を分たんがために設けられたるものなれば、これによりて、一樂曲中の强弱の部分を知ることを得べし。斯く一樂曲中の强弱の部分を定め、其存在を明にしたるものを卽ち**拍子**と云ふ。

四。小節中の强弱は、何れも拍數を以て分つ。而して樂曲の性質によりては、小節中の强弱の部分に、多少の差異あるものと知るべし。

五。樂曲の拍子は、其小節中に含まるゝ音符の數により、豫め知ることを得べしと雖も、尙ほ一見して判明ならしめんがために、樂曲の首に或る記號を附記す。之を**拍子記號**と名づく。

六。拍子記號は分數を以て之を表す。

分數の分母は、一拍に計ふべき音符の大小を示し、分子は、一拍に計ふべき音符の數量を示せるものなり。例へば$\frac{4}{4}$の分母は、四分音符を表し、分子は四分音符四個なることを表せるものなり。此場合には四分音符を一拍と定め、一小節を四拍に計ふべきものなりとす。

七。普通用ふる拍子には、二拍子、四拍子、三拍子及び六拍子の四種あり。

此他**九拍子**、**十二拍子**等あれども、普通音樂に用ふること少し。

第一節　二拍子

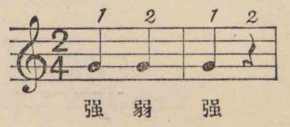
一。二拍子とは、一小節を二拍に計ふるものにして、四分の二拍子、二分の二拍子の二種あり。

二拍子は一個の強聲部を有す。

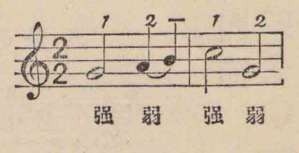
快活なる步調的の樂曲は重に此拍子にてなれるもの多し。軍歌體の如きものは殊に然りとす。

普通用ふる唱歌の多くは四拍子にてなれり。此拍子は二拍子の如く軍歌體のものには多く用ひざれども、優美快活なるものに適するものなり。四拍子中にても四分の四拍子は最も普通に用ひらるゝはざるものとす。但し休止符も拍子の計數に加ふべきものとす。

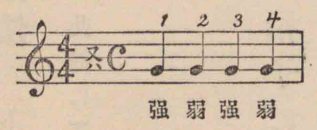
四分の二拍子



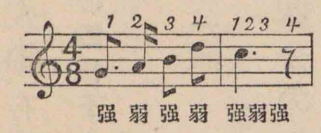
二分の二拍子



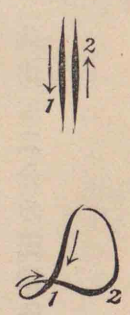
四分の四拍子



八分の四拍子



拍法。　下拍、上拍。



小節中の音符は、拍子記號のものと同價値たる以上は、其種類及び其數の多少を問はざるものとす。但し休止符も拍子の計數に加ふべきものとす。

第二節　四拍子

一。四拍子には、四分の四拍子、八分の四拍子の二種あり。

四拍子は二拍子の重複したるものにして、二個の強聲部を有す。然れども3の強聲は、1のものより少し輕きものとす。

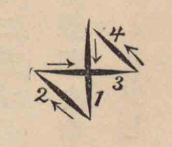
ものなれば此拍子を普通拍子とも云ふ。

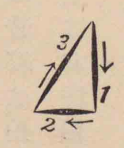
高尚なる樂趣を有する樂曲は三拍子にてなる。此拍子にてなれる樂曲は奏唱する場合に拍子上の困難なるものなれば、特に注意するを要す。小學校唱歌集「岩もる水」、「岸の櫻」、「忠臣」等は何れも此拍子にてなれるものなり。

一。三拍子には、四分の三拍子、八分の三拍子の二種あり。

三拍子は一個の強聲部を有す。

拍法。 下拍、左拍、上拍。

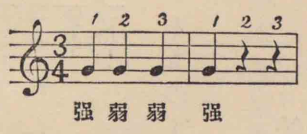




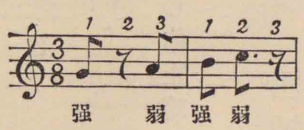
此他に二分の三拍子あれども省く。

第三節　三拍子

四分の三拍子



八分の三拍子



第四節　六拍子

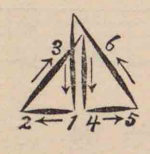
六拍子は重に優美なる樂曲に用ひらるゝものなれども、二拍子の拍法を用ふるときは非常に活潑なるものとなる。舞踏の曲には往々斯の如きものあり。

此拍子も亦三拍子の如く拍子上の困難なるものなれば注意するを要す。小學唱歌集「燕」、「年たつ今朝」等は何れも此拍子にてなれるものなり。

一。六拍子には、四分の六拍子、八分の六拍子の二種あり。

六拍子は三拍子の重複したるものにして、二個の強聲部を有す。然れども4の強聲は1のものより少し輕きものとす。

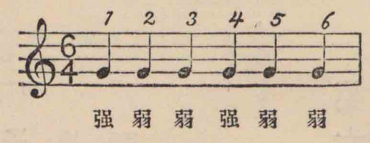
拍法。 下拍、左拍、右拍、右拍、上拍。



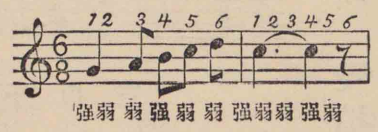
急速なる六拍子に於ては、二拍子の拍法を用ふ。

四分の六拍子は、普通音樂に用ふること少し。

四分の六拍子



八分の六拍子



第五節　正格及び變格小節

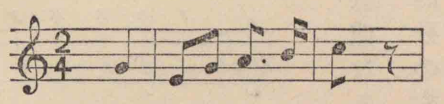
一。樂曲の小節には、正格、變格の二種あり。正格小節とは、規則

正格小節を以てなれる樂曲は、常に強聲部に始るものなれども、樂曲の「リズム」即ち節調に變化を與へんがために、變格小節を用ふ。小學唱歌集「盤の光」、「岸の櫻」、「遊獵」等は何れも變格小節のものなり。

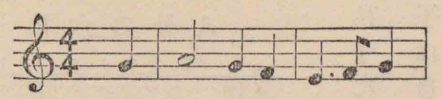
正しく強聲部に始りて、弱聲部に終るものを云ひ、**變格小節**とは、樂曲の最終小節の一部を割きて、樂曲の首に置きたるものにして、即ち弱聲部に始りて強聲部に終るものを云ふ。

變格小節

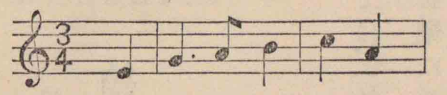
二拍子



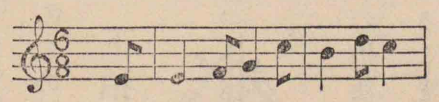
四拍子



三拍子



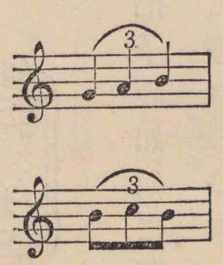
六拍子



三拍子及び六拍子にありては、強聲部に終らざれども、最終の小節の一部を割きて始に置きたるものは、總て變格小節と名づくるものと知るべし。

第六節　變拍子（三連音符）及び切分音

一。樂曲中の或る一部に、拍子上の變化を與へんがために、四分音符三個を二分音符一個の長さに、或は八分音符三個を四分音符一個の長さに奏せしむることあり。此場合には三個の音符を連結し、3の數字を附記して普通の音符との區別を明にす。之を**三連音符**と云ひ、拍子上よりは、之を**變拍子**と云ふ。



變拍子

二。三連音符は、首の音符に、少し勢を附して奏するをよしとす。

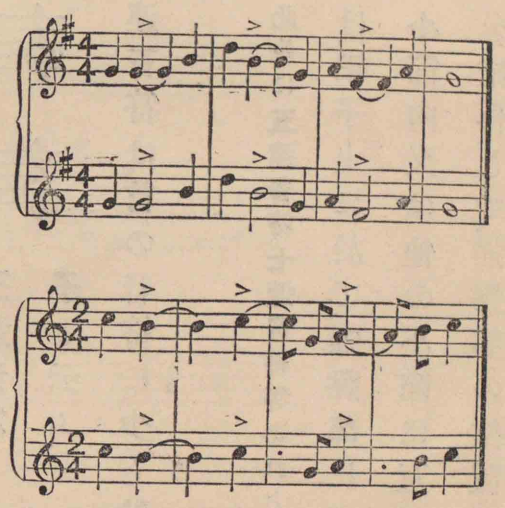
此他に**五連音符**、**七連音符**等あれども、普通音樂に用ふることなし。

三。尚ほ、拍子上に於て、強聲部に變化を起さしめんがために、一小節内又は他の小節に亙り、弱聲部と強聲部との二音符を結合して、強聲部の位置を變換したるものを**切分音**

三連音符を用ひたる樂曲は、小學唱歌集中に見ることを得ざれども、中等唱歌集「御國の民」の終りの方に於て見出すことを得べし。

切分音を有する樂曲を奏唱するには、拍子上の注意を用ふることを要す。小學唱歌集「菊」の曲に就きて知るべし。

切分音



と云ふ。

四。強聲部は、常に切分音の首の音に移るものとす。故に切分音は、總て強聲部に屬するものと知るべし。

第七節　速度記號

一。拍子の如何に關らず、樂曲は其性質によりて、進行の速度に緩急の差あり。之を指示する記號を名づけて、**速度記號**と云ふ。

二。速度記號には、樂曲全體に亙るものと、其一部分の速度變

更に關するものとの二種あり。

(1) 樂曲全體に亙る速度記號。

Adagio（アダジオ）……緩徐に。
Allegretto（アレグレット）……快活に、「アレグロ」の速ならず。の如く
Allegro（アレグロ）……急速に、快活に。
Andante（アンダンテ）……稍緩徐に。
Andantino（アンダンチーノ）……「アンダンテ」より少し速く。
Grave（グラーヴェ）……徐に、莊嚴に。
Larghetto（ラルゲット）……「ラルゴ」の如く遲からず。
Largo（ラルゴ）……最も緩徐に。
Lento（レント）……極めて緩徐に。
Moderato（モデラート）……通常の速さに。
Prestissimo（プレスチッシモ）……非常に速く。
Presto（プレスト）……急速に「アレグロ」より速く。
Vivace（ヴィヴァーチェ）……快活に、迅速に。

樂曲中、或る一音符を殊更に延長せしめんとするときは、單に其一音を延長せしむるのみならず、其「リズム」の始る處より「リターダンド」を用ひ、其延長せしめんとする音符に至りて止むるものとす。而して次の小節よりは本來の速度に復するものなれば、必らず「ア、テンポ」を用ふべきものとす。

(2) 樂曲の一部分の速度變更記號。

（略　字）

Accelerando（アクセルランド）……Accel.……漸次急速に。
Ritardando（リターダンド）……Rit.……漸次緩徐に。
Ritenuto（リテヌート）……漸次緩徐に。
Stringendo（ストリンゼンド）……漸次急速に。
Ad libitum（アッド リビチューム）……Ad lib.……奏者の意見に。
A tempo（アテンポ）……本來の速度に（一時變更したる速度を、本來の速度に復せしむるときに用ふ）。

速度記號の樂曲全體に關するものは、樂曲の首の上部に、一部分に關するものは、樂曲中其部分の上部に記するものとす。

第七章　音階

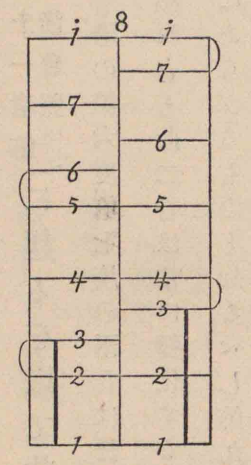
一。七音の順序正しく、順次繼續したるものを**音階**と云ふ。

二。音階に左の二種あり。

(1) 長音階。 第三音と第四音及び第七音と第八音との間に半音を有するもの。

(2) 短音階。 第二音と第三音及び第五音と第六音との間に半音を有するもの。

長音階
短音階



音階の第八音は、第一音の重出したるものなれば、數字を記すに8の字を用ひずして、1の字を用ふ。然れども第一音との區別を明にせんがために、數字の上部に一點を附す。此數字は音階の階梯に附したる名稱なれば、之を**階名**と云ふ。

三。音階の長短とは、固より比較的の名稱にして、音階を組織

せる音程の長短により、其名稱を附したるものなり。

四。音階の第三音は、其性質上、最も緊要なる音なりとす。而して長音階は長第三度（第十一章第一節參照）に起り、短音階は、短第三度（第十一章第一節參照）に起るを以て此名あり。

短音階の第六度、第七度の兩音は、長音階のものに比して何れも短音程なり。然れども此二音は常に變化するものなれば、短音階の性質上、緊要のものにあらざるものと知るべし（第九章參照）。

五。長短兩音階は、何れも五個の全音と、二個の半音とより成りて、全く全音の多數よりなれるを以て、此二音階を總稱して、**全音階**と云ふ。

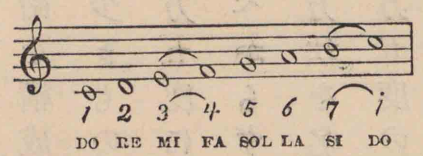
第八章　長音階

現今、最も多く用ひらるゝ樂曲は、大抵長音階の旋法にてなれるものなり。

一。長音階は其性質爽快にして、快活なる感情を表すに適せるものなり。

二。七音の音列中、長音階の順序に適へるものは、唯**ハ**より**ハ**に至る八音の一列あるのみなり。

ハ調長音階



階名の稱呼								
西洋	DO	SI	LA	SOL	FA	MI	RE	DO
日本	i ヒー	7 ナー	6 ムー	5 イー	4 ヨー	3 ミー	2 フー	1 ヒー
	ド	シー	ラー	ソール	ファー	ミー	レー	ド

音階は其第一音の音名を以て名稱とす。之を**調名**と云ふ。而して音階の第一音は、其音階の最も主要の音なるを以て、之を**主調音**と云ふ。

ハ調音階は、本位音のみにて成立するものにして、他の長音階の基礎ともなり、模範ともなるものなれば、基礎音階又は**模範音階**等の稱あり。

音階を唱ふには、音名を用ひずして階名を用ふ。

移調法は音樂を學ばんとする者の精通せざるべからざるものなり。唱歌教師たらんとするには、特に然りとす。例へば**ト**調の唱歌を授けんとする場合に、生徒の聲域に適せざるときは、原調を他の高き調或は低き調に移す必要あるべし。若し生徒の聲域に適せざる原調のまゝにて授けんか、生徒の發聲器を害すること多かるべし。

三。音階は、**ハ**調長音階一個のみにては足らざるを以て、尙ほ各音によりて、數多の長音階を構成することを得。

四。音階を構成するには、**ハ**調長音階に比して、成るべく變化の少きものを先にす。斯くなさんには、**ハ**調を基礎として、上方五度に構成するか、下方五度に構成するかを選ばざるべからず。これ變化の最も少きものなればなり。此構成の方法を名づけて**移調法**と云ふ。

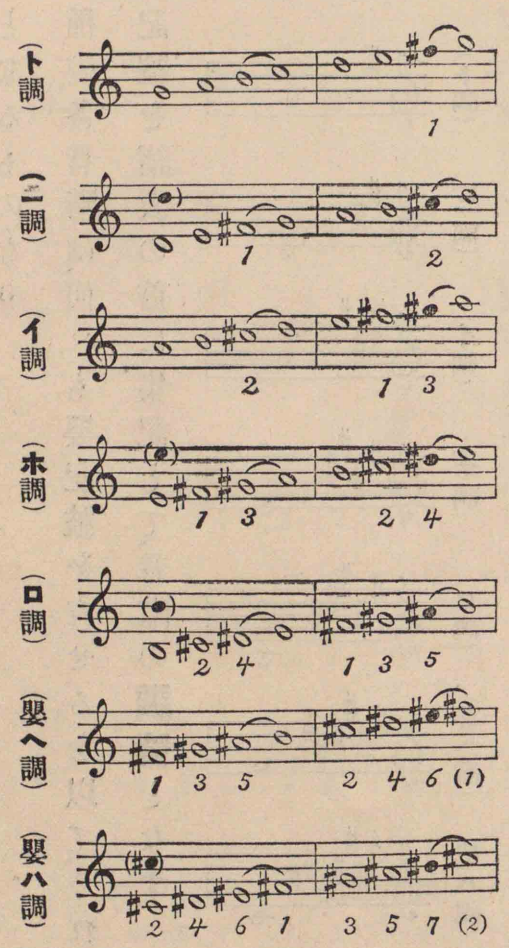
五。上方五度の移調には嬰記號を要し、下方五度の移調には變記號を要す。

第一節　嬰種長音階

一。**ハ**調長音階を基礎として、上方五度に順次移調するときは、**ト**調、**ニ**調、**イ**調、**ホ**調、**ロ**調、嬰**ヘ**調、嬰**ハ**調等の七長音階を得。而して此等の音階は、何れも嬰記號を有せるを以て、總稱して**嬰種長音階**と云ふ。

嬰種移調に於て、嬰記號の附くべき音の順序は、**ヘ**を第一とし次に**ハ**、**ト**、**ニ**、**イ**、**ホ**、**ロ**の順序によりて附くべきものとす。下圖に12の數字を附したるは、此順序を知らしめんがためなり。

嬰種長音階移調の順序

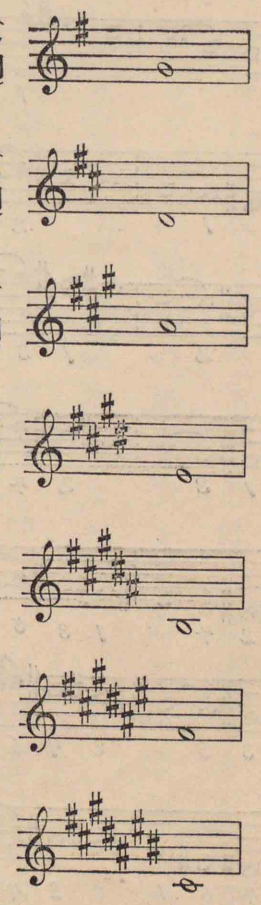


二。嬰種移調に於ては、舊音階の第五音は新音階の第一音と

なり、舊音階の第四音は常に嬰音となりて、新音階の第七音となるものなり。

三、嬰種の各音階は、何れも嬰記號を有せるを以て、それらの嬰記號を譜表の首に集記して、音階の**調號**となす。

調號



調號中、最後の嬰音は、常に其音階の第七音なり。故に音階の主調音は、最終嬰音の上一度にあるものと知るべし。

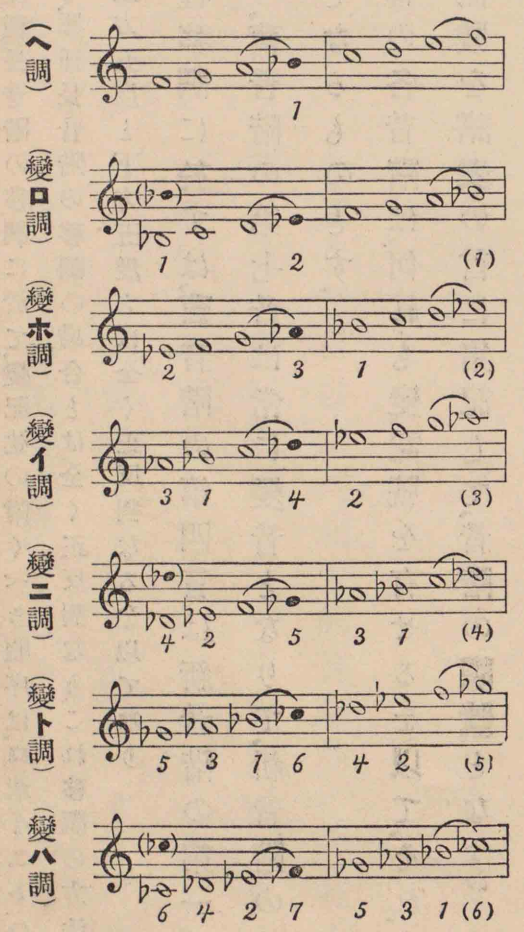
第二節　變種長音階

變ニ調と嬰ハ調。
變ト調と嬰ヘ調。
變ハ調とロ調。

右の嬰變兩種音階は、譜表上に於ては何れも一度の差を有すれども、有鍵樂器の鍵盤上に於ては、全く同一なるものなり。故に七變を有する變ハ調を、便利上、五嬰を有するロ調に記譜することあり。然れども實際上の結果は全く同じきものと知るべし。

一、ハ調長音階を基礎として、下方五度に順次移調するときは、ヘ調、變ロ調、變ホ調、變イ調、變ニ調、變ト調、變ハ調等の七長音階を得。而して此等の音階は、何れも變記號を有せるを以て、總稱して**變種長音階**と云ふ。

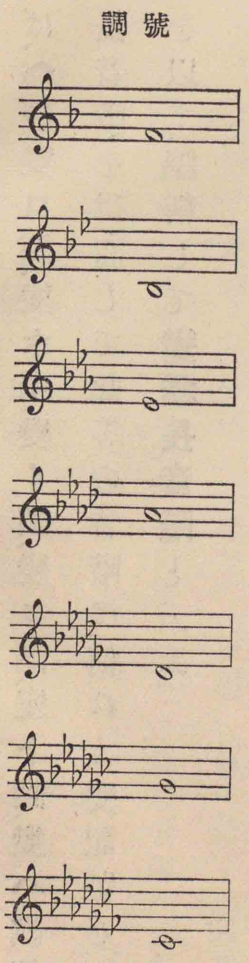
變種長音階移調の順序



變種長音階の移調に於て、變記號の附くべき順序は、**ロホイニトハヘ**にして、嬰種長音階の移調の場合とは、全く正反對なり。これ移調の方法に於て、上方五度と下方五度とは、全く正反對なるを以てなり。

二。變種移調に於ては、舊音階の第四音は新音階の第一音となり、舊音階の第七音は常に變音となりて、新音階の第四音となるものとす。

三。變種の各音階は、何れも變記號を有せるを以て、それらの變記號を譜表の首に集記して、音階の**調號**となす。



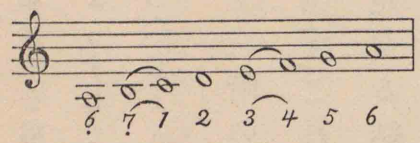
調號中、最後の變音は、常に其音階の第四音なり。故に音階の主調音は、最終變音の一つ前の變音(即ち下方四度或は上方五度)にあるものと知るべし。

第九章　短音階

一。短音階は、其性質陰鬱にして、悽愴悲哀なる感情を表すに適せるものなり。

二。短音階に、自然的、和聲的、旋律的の三種あり。

三。七音の音列中、短音階の順序に適へるものは、獨り**イ**より**イ**に至る八音の一列あるのみなり。此音階は全く本位音より成れるを以て、**自然的短音階**と云ふ。



短音階を唱ふには、自然的、和聲的、旋律的の如何に關せず、短音階の階名によらずして、便宜上、長音階の階名を用ふ。卽ち**イ**調短音階は、**ハ**調長音階の第六音より始る八音の一列と、全く同一なるものなり。

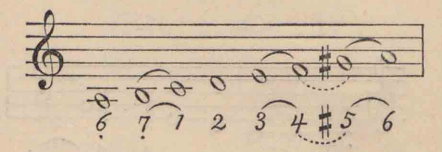
四。總て音階の第七音は、其第八音との間、半音程ならざるべからず。これ此兩音の間に半音を聽くときは、音階の完全滿足なる結尾を感ぜしむるを以てなり。故に音階の第七音は、之を**感音**と云ひ、又第八音に導くが如き感あるを以て、**導音**とも云ふ。

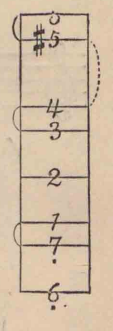
音階を唱ふときに常に其導音に注意すべし。此第七音は從來の經驗上、常に低下する傾向を有す。殊に上行の場合に甚しきものとす。

五。然れども自然的短音階は、第五音と第六音との間、半音程にして、第七音と第八音との間、全音程なり。故に第七音を導音たらしめんがため、第七音を半音程上昇せしめて、第八音との間を半音程となす。之を**和聲的短音階**と云ふ。

音樂上の感情を喚起せしめ、旋律の趣味を增さんがため、二個若くは數個の旋律を同時に奏唱することあり。この同時に響く數音は卽ち和聲の原理によりて、組織せられたるものなり。この理を究むる學を和聲學と云ふ。

イ調短音階的和聲





變音	嬰音	
♭7ネ	♯6ユ	
♭6モ	♯5ツ	
♭5エ	♯4ヤ	
♭3メ	♯2タ	
♭2ヘ	♯1ト	

♯5は5と區別せんがため（ツー）と唱ふものとす。左に他の總ての變稱を示さん。

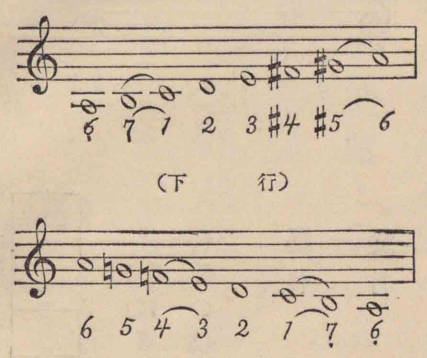
和聲的短音階は、重に和聲學上に用ふるものなり。

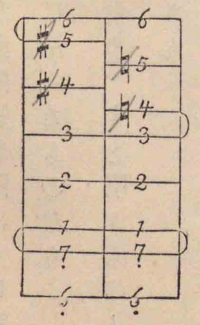
六。和聲的短音階は、第七音の變遷により二個の闕點を生ぜり。卽ち一には此變化のため三個の半音と、三個の全音及び一音半の音程とを有し、全音階の資格を失へること、二には一音半（增二度第十一章第二節參照）なる音程は、唱歌上、最も困難なるものなり。

七。以上二個の闕點を補はんがため、第六音を半音上昇せしむ。斯くするときは、全音階の資格を全うせしむるのみならず、又増音程の成立をも防ぎ、一舉兩得の方法なりとす。而して導音は重に上行に必要なるものなれば、下行の際は、七音を原位に復せしむると共に、第六音をも原位に復せしめて、全く自然的短音階の如くす。之を**旋律的短音階**と云ふ。

短音階にてなれる樂曲は、長音階にてなれるものに比して其數少し。小學唱歌集「墳墓」、「頭の雪」等は短音階の旋法にてなれるものなり。樂曲の短音階なるか、長音階なるかを知らんとするには、樂曲の最終の音と中途に現出する臨時記號とに注意すべし。これ樂曲は大抵、音階の主調音にて終れるものなればなり。

旋律的イ調短音階





上行のときに用ふる變化記號は、**臨時記號**として用ふるものとす。

八。旋律的短音階は、專ら作曲上に用ふるものにして、吾人の單に短音階と稱するものは、此音階のことなりと知るべし。

九。短音階も亦長音階と同じく、上方五度又は下方五度に移調して、各種の調を構成することを得。而して上方五度の移調には嬰記號を、下方五度の移調には變記號を要することも、亦長音階と同じきものなり。

第一節　嬰種短音階

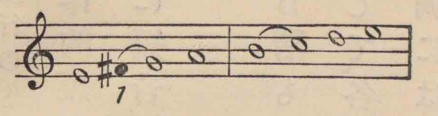
一。**イ**調短音階を基礎として上方五度に順次移調するときは、**ホ**調、**ロ**調、嬰**へ**調、嬰**ハ**調、嬰**ト**調、嬰**ニ**調、嬰**イ**調等の七短

音階を得。

二。嬰種短音階の第二音は、常に嬰音ならざるべからざるを以て、此嬰記號は調號として用ふ。然れども第六音、第七音に要する嬰記號は、唯上行のときのみに用ふるものなるを以て、唯臨時記號として用ふ。左に一二の例を示さん。

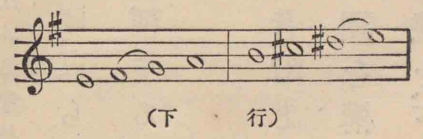
短音階に於ても嬰種移調のときは、長音階の場合と同じく嬰記號の附くべき音の順序は**へ**、**ハ**、**ト**、**ニ**、**イ**、**ホ**、**ロ**なりと知るべし。

自然的**ホ**調短音階

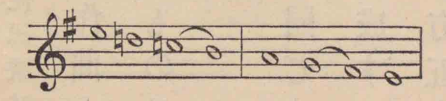


旋律的**ホ**調短音階

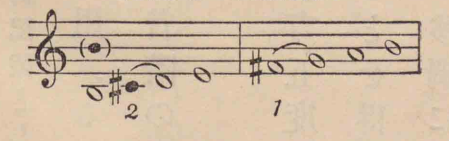
（上　行）



（下　行）

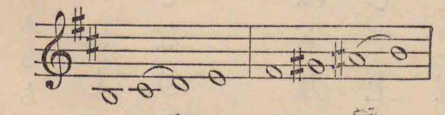


自然的**ロ**調短音階

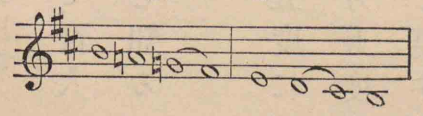


旋律的**ロ**調短音階

（上　行）

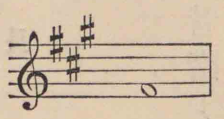


（下　行）

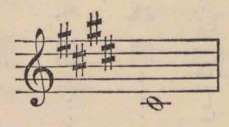


三。右の例により移調法の大略を知るを得ん。然れば他の各種の音階は、唯其調號と主調音とをのみ示さん。

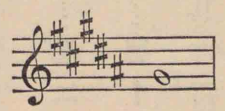
嬰**へ**調



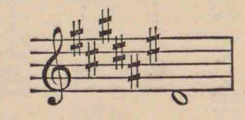
嬰**ハ**調



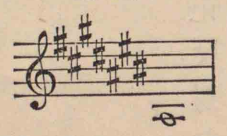
嬰**ト**調



嬰**ニ**調



嬰**イ**調



四。短階音は、以上の如き移調の方法によらずして、長音階との關係により、容易に各種の音階を構成するを得べし。

初學者は、先づ第一に短音階は、長音階の第六音より始ることを記憶すべし（反對に言へば長音階は短音階の第三音より始る）。例へば**ハ**調長音階の第六音より始るものは**イ**調短音階にして、何れも一の調號を有せず。一嬰を有する**ト**調長音階の第六音より始るものは、**ホ**調短音階にして、何れも調號に一嬰**へ**を有するが如し。以下推して知るべし。

（長音階）　（短音階）

ハ調 ⇄ 三音 六音 ⇄ イ調

ト調……同……ホ調……（一嬰）

ニ調……同……ロ調……（二嬰）

イ調……同……嬰ヘ調……（三嬰）

ホ調……同……嬰ハ調……（四嬰）

ロ調……同……嬰ト調……（五嬰）

嬰ヘ調……同……嬰ニ調……（六嬰）

嬰ハ調……同……嬰イ調……（七嬰）

長短兩音階の關係

五。長音階と短音階とは、其性質に於て全く正反對なれども、音階の組織上、最も親密なる關係を有することは、前に說くところによりて明なり。故にイ調短音階はハ調長音階の**關係短音階**とも云ひ、ハ調長音階はイ調短音階の**關係長音階**とも云ふ。他の諸音階は皆之に準じて知るべし。

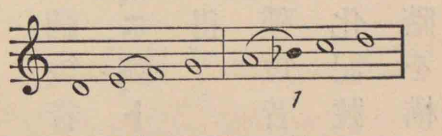
第二節　變種短音階

一。イ調短音階を基礎として、下方五度に順次移調するときは、ニ調、ト調、ハ調、ヘ調、變ロ調、變ホ調、變イ調等の七短音階を得。

二。變種短音階の第六音は、旋律的短音階の上行のときには、變化記號を用ふるを要せざるが如くなれども、自然的短音階を構成する上に於て、常に變音ならざるべからず。加之、次の音階を構成する上に於て、最も緊要なる音（短三度の音）なるを以て、此變記號は調號として用ひ、他は臨時記號と

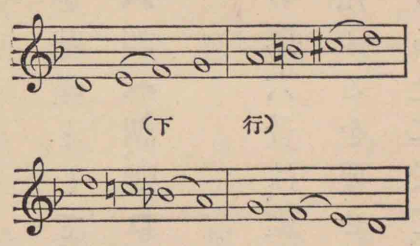
して用ふること、嬰種長音階の場合に同じ。左に一二の例を示さん。

自然的ニ調短音階



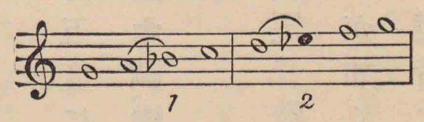
旋律的ニ調短音階

（上　行）



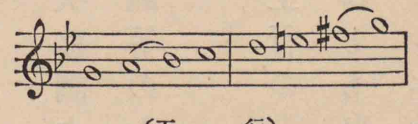
（下　行）

自然的ト調短音階

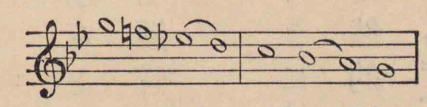


旋律的ト調短音階

（上　行）



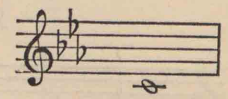
（下　行）



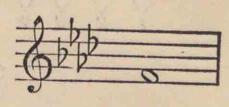
三。右の例により移調法の大略を知るを得ん。然れば他の各種の音階は、唯其調號と主調音とをのみ示さん。

短音階の變種移調のときにも、長音階の場合と同じく、變記號の附くべき順序はロ、ホ、イ、ニ、ト、ハ、ヘなりと知るべし。

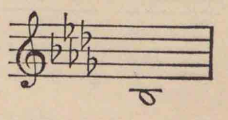
ハ調



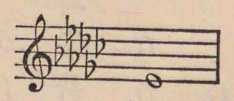
ヘ調



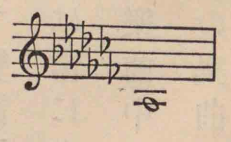
變ロ調



變ホ調



變イ調



四。長短兩音階の關係は嬰種短音階のときと同じ。

（長音階）　　（短音階）

ヘ調（三音）　　六音（ニ調）……（一變）

變ロ調……同……ト調……（二變）

變ホ調……同……ハ調……（三變）

變イ調……同……ヘ調……（四變）

變ニ調……同……變ロ調……（五變）

變ト調……同……變ホ調……（六變）

變ハ調……同……變イ調……（七變）

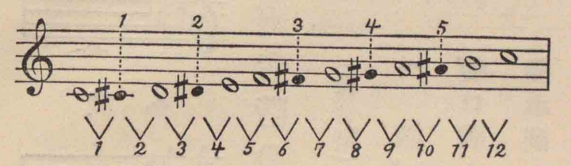
長音階、短音階は何れも全音、半音の順序を異にして其旋法に特殊なる性質を有せり。然れども半音階は悉く半音のみなれば何れの音より始むるも同一にして音階の始終の感覺を與ふることなし。故に長音階、短音階の如く音階の名稱を與ふるに不適當なるものなり。されば此音階は一樂曲の主宰たるの資格なきものにして常に全音階にてなれる樂曲中に混用せられて、裝飾的に用ひらるゝ所以なり。

第十章　半音階

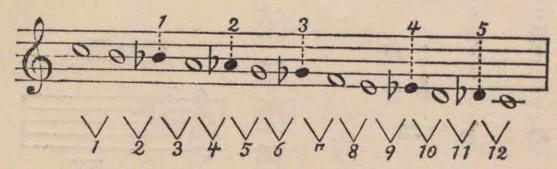
一。**半音階**とは總て半音程のみにて成れる音階にして、八音内に八個の基礎音と五個の變化音との十三音内に含有する十二個の半音程よりなれるものなり。

半　音　階

（上　行）



（下　行）



二。上行半音階の變化音は、總て嬰記號を用ひ、下行のものは總て變記號を用ふ。

三。半音階は常に全音階にてなれる樂曲中に混用して、これ等の樂曲を裝飾する

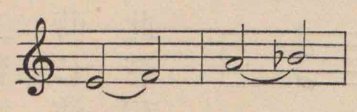
全音階的半音のことを、普通半音、半音階的半音のことを、變體半音と改稱せる書あれども、本書は從來の名稱を襲用したり。

に用ふるものなり。

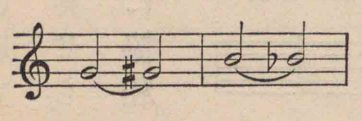
第十一章　音程

一。或る二音間の距離は、之を**音程**と云ふ。音程の最も簡單なるものは、半音程、全音程の二種にして、他は其二音間に含有する半音、全音の多少によりて、之を種々なる音程に分つものなり。

全音階的半音



半音階的半音

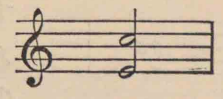


二。半音に全音階的、半音階的の二種あり。**全音階的半音**とは、二度に渉りて其二音間に成立する半音を云ひ、**半音階的半音**とは同度にある二音の一が、變化記號により上下せられて

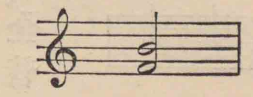
其二音間に成立する半音を云ふ。

三。同時に演奏せらるべき二音間の距離も、亦之を音程と云ふ。此音程に協和音程、不協和音程の二種あり。

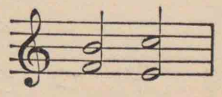
協和音程



不協和音程

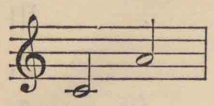


（不協）（協）

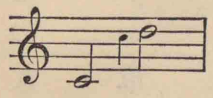


四。**協和音程**とは、同時に響く二音の調和最も良く、耳覺に滿足なる快感を起さしむるものにして、**不協和音程**とは、二音の調和不良にして、協和音程の繼出を要し、茲に始めて滿足なる感を起さしむるものなり。

單音程



複音程

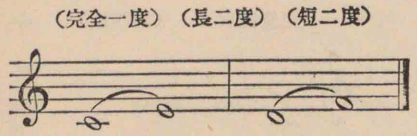


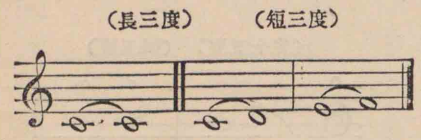
五。八音以内に成立する諸音程は總て**單音程**と云ひ、八音以外に渉るものは總て**複音程**と云ふ。

六。通常使用する音程に、全音階的音程、半音階的音程の二種あり。

第一節　全音階的音程

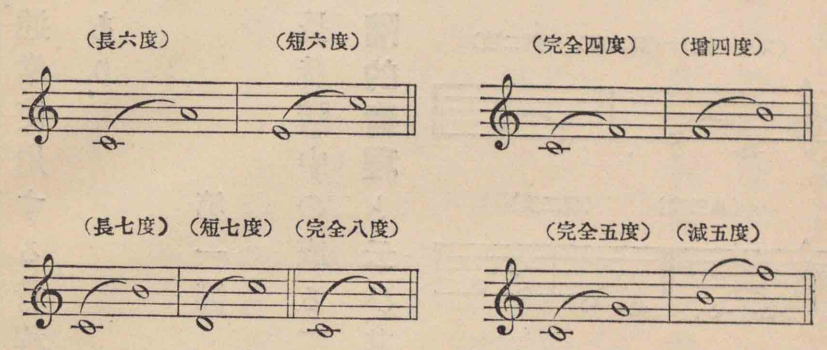
一。長音階中の或る二音間に成立する音程は、總て之を**全音階的音程**と云ひ、其數十四個あり。





二。十四音程は其種類により、冠せしむるに、**完全**、**長**、**短**、**增**、**減**等の語を以てす。

（1）**完全第一度**（和聲學上、常に一度音程として用ふ。）
（2）**長第二度**（二度に渉り、一全音を含有す。）
（3）**短第二度**（二度に渉り、一半音を含有す。）
（4）**長第三度**（三度に渉り、二全音を含有す。）



(5) 短第三度（三度に渉り、一全音及び一半音を含有す。）

(6) 完全第四度（四度に渉り、二全音及び一半音を含有す。）

(7) 増第四度（四度に渉り、三全音を含有す。）

(8) 完全第五度（五度に渉り、三全音及び一半音を含有す。）

(9) 減第五度（五度に渉り、二全音及び二半音を含有す。）

(10) 長第六度（六度に渉り、四全音及び一半音を含有す。）

(11) 短第六度（六度に渉り、三全音及び二半音を含有す。）

(12) 長第七度（七度に渉り、五全音及び一半音を含有す。）

(13) 短第七度（七度に渉り、四全音及び二半音を含有す。）

(14) 完全第八度（八度に渉り、五全音及び二半音を含有す。）

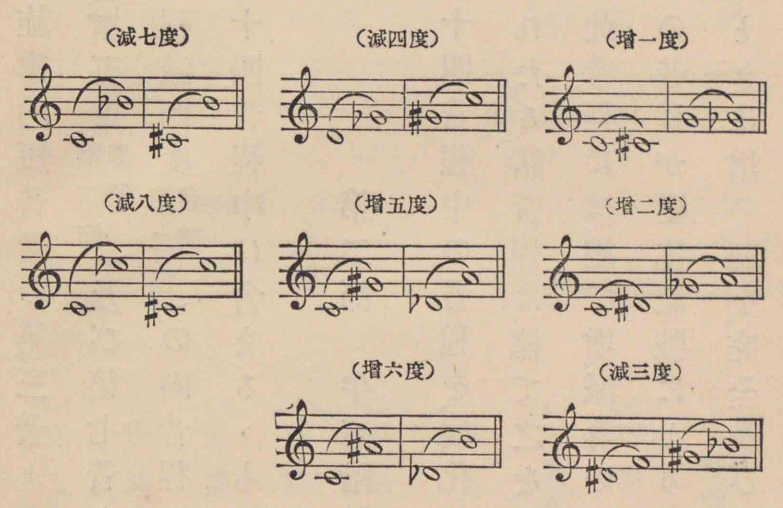
三。旋律的短音階の第三音より、上行第七音に至る五度音程（増五度第二節参照）及び第七音より上行第三音に至る四度音程（減四度第二節参照）の兩音程を除く外の諸音程は、總て前記十四音程中に含まるゝものなり。

第二節　半音階的音程

一。十四音程中の音程を、變化記號により一半音を増減せられたる諸音程は、總て之を**半音階的音程**と云ふ。

二。此音程には總て増、減等の語を冠せしむ。卽ち完全及び長の音程が變化記號によりて、半音階的半音を増加したるときは増の語を、完全及び短の音程が變化記號によりて、半音階的半音を減除したるときは減の語を冠せしむ。

三。半音階的音程中、普通用ふるものは左の八種とす。



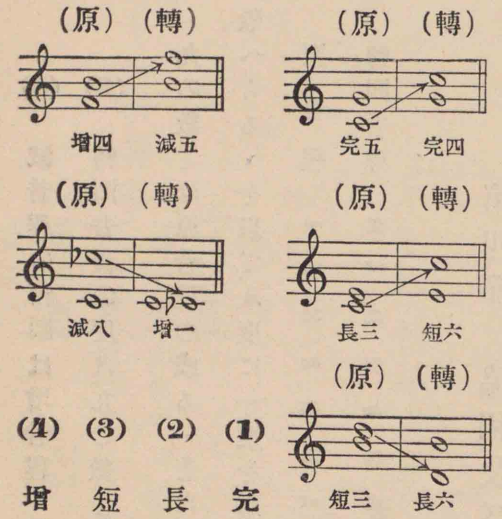
(1) 増第一度（一半音階的半音を含有す。）
(2) 増第二度（一全音及び一半音階的半音を含有す。）
(3) 減第三度（二全音階的半音を含有す。）
(4) 減第四度（一全音及び二全音階的半音を含有す。）
(5) 増第五度（三全音、一全音階的半音及び一半音階的半音を含有す。）
(6) 増第六度（四全音、一全音階的半音及び一半音階的半音を含有す。）
(7) 減第七度（四全音及び二全音階的半音を含有す。）
(8) 減第八度（四全音及び三全音階的半音を含有す。）

音程の轉回は、唱歌には多く其必要を認めざれども、和聲學を修めんとする場合に必要なるものなれば、能く知悉するを要す。

第三節　音程の轉回

一。音程の下音を上方八音に移し、或は上音を下方八音に移す等の變化を、音程の**轉回**と云ふ。

二。音程は轉回によりて、必ず其度を異にすれども、其性質は變化するものと、變化せざるものとの二種あり。左に轉回にて得たる結果を示さん。



(1) 完全音程の轉回は完全音程。
(2) 長音程の轉回は短音程。
(3) 短音程の轉回は長音程。
(4) 増音程の轉回は減音程。

(5) 減音程の轉回は增音程。

(6) 轉回音程の度は、九の數より原音程の度を減じて得たる數。

九の數とは、原音程の或る一音は、轉回音程の時にも再び其度數の中に數へらるゝを以て、八度に一度を加へたるものなりと知るべし。

原音程	1	2	3	4	5	6	7	8
轉回音程	8	7	6	5	4	3	2	1

第四節　協和及び不協和音程

一。協和、不協和音程なる意義は第十一章に說きたれば、玆には前述の諸音程につき其所屬を示さん。

二。協和音程を分ちて、完全及び不完全協和音程の二種とす。

完全協和音程とは、二音の調和最も完全なるものにして、

不完全協和音程とは、前者に次いで完全なるものを云ふ。

- 協和音程
  - 完全協和音程
    - 完全一度
    - 完全四度
    - 完全五度
    - 完全八度
  - 不完全協和音程
    - 長三度
    - 短三度
    - 長六度
    - 短六度
- 不協和音程
  - 長二度
  - 短二度
  - 長七度
  - 短七度
  - 增四度
  - 減五度
  - 此他、半音階的諸音程

協和、不協和とは、物理學の原則によるものにして、二音の振動比數の簡單なるに從ひて、益〻協和音となり、振動比數の複雜なるに從ひて、愈〻不協和音となるものなり。

音階及び音程は、**和聲學**を學習するときに於て基礎となるものなれば、最も注意するを要す。若しこれ等に精通せざれば、和聲學の學修、敢て望むべからざるなり。

第十二章　發相記號

一。樂曲固有の趣味を發輝せしめて、感動の度を益、深からしめんがため、樂曲の首に或は或る一部分に又は或る一音符に種々の記號を附記す。これ等の諸記號を總稱して**發相記號**と云ふ。

二。發相記號には專ら强弱に關するものと、曲想に關するものとの二種あり。尙ほ以上の部門に屬せしめ難き數種の記號あり。これ等は**雜記號**として說くべし。

第一節　强弱に關する發相記號

（略號）　（術語）　（意義）

p……(Piano.)……弱く。
pp……(Pianissimo.)……最も弱く。
f……(Forte.)……强く。
ff……(Fortissimo.)……最も强く。
mp……(Mezzo piano.)……通常の弱さに。
mf……(Mezzo Forte.)……通常の强さに。
sf.……(Sforzando.)……急に强く。
Ac.……(Accent.)……特に强く。
<……Cresc.…(Crescendo.)……漸次强く。
>……dim.……(Diminueudo.)……漸次弱く。

第二節　曲想に關する發相記號

Agitato……Animato……感情を以て。
Cantabile……謠ふが如くに。

Con gusto（コン グスト）……趣味を以て。
Con moto（コン モト）……感情を以て。
Dolce（ドルチェ）……柔かに。
Doloroso（ドロロソ）……悲を以て。
Fuoco（フオコ）……急速に精神を以て。
Furioso（フリオソ）……急いで。
Leggiero（レギエロ）……輕く。
Maestoso（マエストソ）……威嚴を以て。
Passionato（パッシヨナート）……感動して。
Scherrando（セランド）……輕快に。
Sostenuto（ソステヌート）……勢を減せずに。
Tenuto（テヌート）……勢を增さずに。
Tranquillo（トランクイロ）……平穩に。
Tutta forza（チユター フオールザ）……最大勢力を以て。
Vigoroso（ヴイゴロソ）……勇壯に。

曲想に關する發相記號は、尙ほ此他にも多けれども、下には唯其一般のみを列記したるのみなり。

第三節　雜記號

一、雜記號に左の四種あり。

(1) 黑點　(2) 垂點　(3) 連結線　(4) 延長

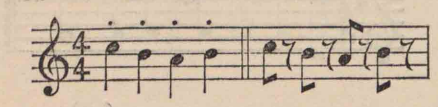
(1) **黑點**は樂曲中、或る一部分の音を短速鮮明に奏せしめんとするときに用ふ。

(2) **垂點**は黑點のものより尙ほ一層鮮明ならしめんとするときに用ふ。

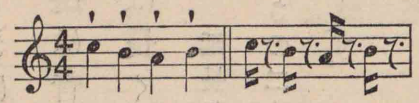
(3) **連結線**は度を異にせる二個以上の音を、圓滑に續けて奏せしめんとす

黑點、垂點等の記號は唱歌の曲には普通用ふること稀なれども、連結線は唱歌の曲に常に多く用ひらるゝものなり。殊に風琴の曲には此連結線を用ふること最も多きものなり。

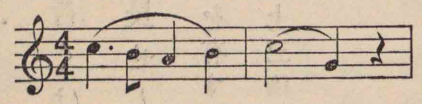
黑點



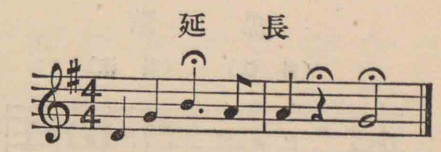
垂點



連結線



延長記號を有せる音符を奏するには其前に必らず「リタールダンド」を用ひ、漸次速度を緩にし、延長記號を有せる音に至りて適宜に延長せしむべきものとす。



(4) **延長**は音符若くは休止符を、固有の歴時よりるときに用ふ。

尚ほ長く延長せしめんとするときに用ふ。

延長記號を有する音符又は休止符は、音符固有の長さの二倍以上三倍位までを、適宜に延長せしむるものとす。

第十三章　省略記號

一。樂曲中、同一の小節あるときは、記譜上の便を計り其一を省きて他の一を繰返すことあり。又短音符にて記譜すべき場合に、長音符にて記し以て、記譜を簡單になすことあり。これ等の記號を稱して、**省略記號**と云ふ。

二。省略記號を大別して、小節に關するものと、音符に關するものとの二種とす。

第一節　小節に關する省略記號

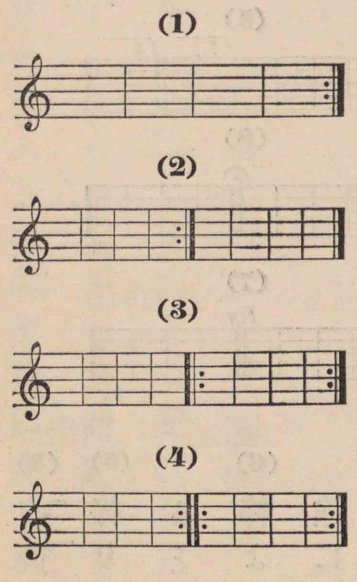
反復記號　D.C. 𝄋 𝄆 𝄇

連續記號　(1) (2) (3) (4)

反始記號　Fin. 𝄐 𝄇

終止記號

終止記號



D.C. は伊太利語の(Da Capo.)

Fin. は同(Fine.)の略語。

(1) 全部の反復。

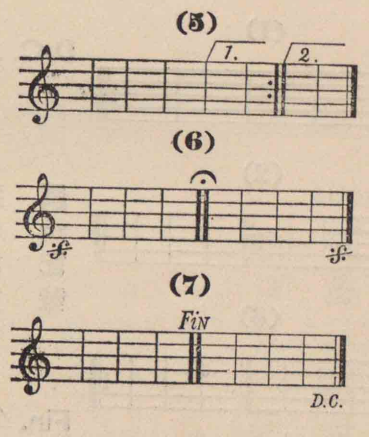
(2) 前半部の反復。

(3) 後半部の反復。

小節に關する省略記號は唱歌の樂譜には餘り多く用ひずと雖も、器樂に用ふる樂譜には最も多く用ひらるゝものなり。

小學唱歌集「見渡せば」、「君が代」等の曲には(6)、「白蓮白菊」の曲には

(5)の省略記號を用ひたるを見る。



(4) 前後兩部の反復。

(5) 終りのみ異なりて、他は同一なるときの反復。

(6) 終より始或は中途に反りて中途に終るときの反復。

(7) 終より必ず始に反り、中途にて終るときの反復。

第二節　音符に關する省略記號

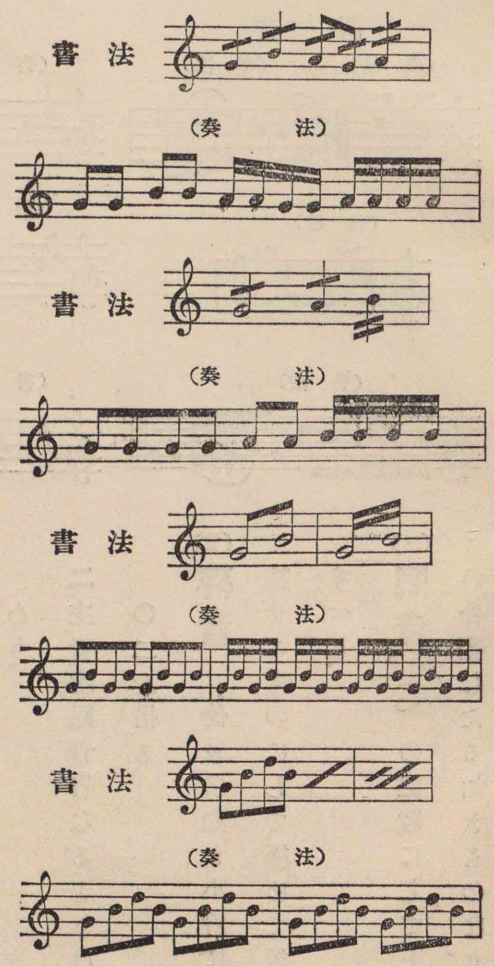
一。音符に關する省略記號の普通に用ふるものには、左の四種あり。然れども最終に示せるが如き記號は、尚ほこの他にも種々あり。然れども其指示法に大差なければ、省く。

音符に關する省略記號は、重に器樂に於て用ひらるゝものなり。

第十四章　裝飾記號

一。全音階にて成れる樂曲の旋律に興味を添へんがため、或る記號を用ふ。之を**裝飾記號**と云ふ。

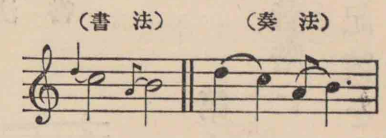
二。普通用ふる裝飾記號に、左の六種あり。



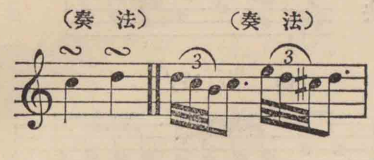
裝飾音は重に器樂に用ふるものなれども、高尚なる唱歌の樂曲には往々これを用ふることあり。然れども普通に用ふる唱歌の曲には用ふることなし。

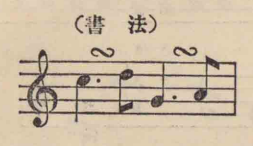
(1) 倚音
(2) 碎音
(3) 回音
(4) 顫音
(5) 漣音
(6) 琶音

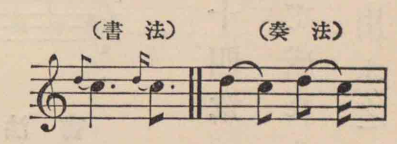
倚音



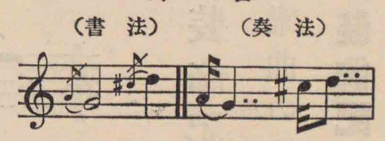
回音

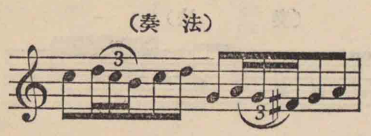






碎音





(1) 倚音　大符の前にある小符にして、大符の上一度或は下一度にあり。

一。主音より其音長の二分の一を借るものと、四分の一を借るものとあり。

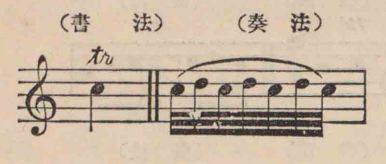
二。主音、附點音符なるときは、其三分の二を借る。

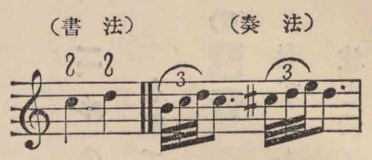
(2) 碎音　倚音の如き小符に斜線を施せるものにして、極めて短明に奏すべし。

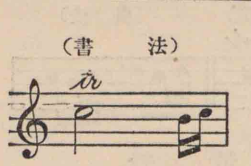
(3) 回音　∽の記號にして、上下碎音の合體したる如きものなり。

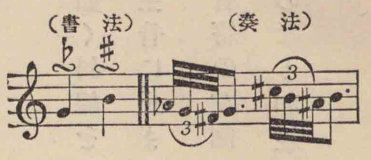
回音の書法奏法には、人々によりて多少異なるものあり。本書には主音の下一度の音は、音階に關せず何れも半音を用ひたり。然れども他の書には回音記號のみなるときは。其音階に屬する音を用ひ、特に半音を用ひんとする場合には、回音記號の下部に變化記號を用ひたり。されば回音の書法奏法には人々の流儀によりて多少の差異ありものと知るべし。

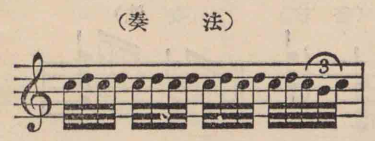
顫音











一。横∽は順回音と云ひ、主音の上一度より下一度に至り主音にて止まるものなり。

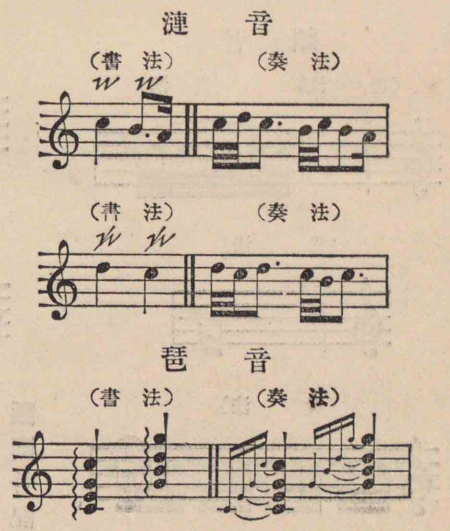
二。竪∽は逆回音と云ひ、主音の下一度より上一度に至り主音にて止まるものなり。

三。主音、附點音符なるときは、始に主音を奏し、次に回音を奏するものなり。

四。回音記號の上部に變化記號あるときは、何れも回音の始の音に附するものとす。

(4) 顫音　trの記號にして、主音と其上一度の音とを瞬速交互に反復するものなり。

一。主音と其上一度の音とを反復して、主音に止まるものあり。



二。主音と其上一度の音とを反復して、回音に止まるものあり。

(5) **漣音**　𝼄 の記號にして、主音の上或は下一度の音を瞬速に經て主音に止まるものなり。

一。𝼄 は**順漣音**と云ひ、主音より上一度の音を經て主音に止まるものなり。

二。𝼄 の如く斜線を有せるものは**逆漣音**と云ひ、主音より下一度の音を經て主音に止まるものなり。

(6) **琶音**　音符の左側にある波線にして、或る和絃の音を順次に神速に奏するものなり。和絃とは一の調和すべき諸音にして、和聲學上之を和絃と云ふ。

第十五章　雅樂調音階

一。雅樂とは、古來より本邦に傳はれる音樂にして、現今にては、重に朝儀、神祭等に用ひられ、民間にありても亦種々の祭儀に用ひらる。

二。現今、教育上に用ふる唱歌の内に、國歌「君が代」を初とし、雅樂調の音階によりて成れるもの多し。故に此音階の大要を西洋の理論に對照して說かんとす。

三。雅樂には五聲、十二律と云ふ名稱あり。左の如し。

五聲　宮（キユウ）　商（シヤウ）　角（カク）　徵（チ）　羽（ウ）

十二律　壹越（イチコツ）　斷金（ダンギン）　平調（ヒヤウデウ）　勝絕（ショウゼツ）　下無（シモム）　双調（サウデウ）
　鳧鐘（フショウ）　黃鐘（ワウシキ）　鸞鏡（ランケイ）　盤涉（バンシキ）　神仙（シンゼン）　上無（カミム）

五聲は西洋音階の階名に相當し、十二律は音名に相當す。

壹越	上無	神仙	盤涉	鸞鏡	黃鐘	鳧鐘	双調	下無	勝絕	平調	斷金	壹越
ニ	變嬰ハニ	ハ	ロ	變嬰ロイ	イ	變嬰トイ	ト	變嬰ヘト	ヘ	ホ	變嬰ホニ	ニ

四、雅樂の音階に、呂旋、律旋の二旋法あり。

第一節　呂旋法

一、五聲に、變徵、變宮の二音を加へたる七音よりなれるものを**呂旋法**と云ふ。此旋法の形狀は殆んど長音階と相同じきものなり。

呂旋法

長音階	
7	變宮
6	羽
5	變徵
4	徵
3	角
2	商
1	宮

二、呂旋法は古來用ふること甚稀なり。

第二節　律旋法

一、五聲に嬰商、嬰羽の二音を加へたる七音よりなれるものを**律旋法**と云ふ。此旋法の形狀は殆んど短音階と相同じきものなり。

律旋法

短音階	
6	宮
5	嬰商
4	商
3	嬰羽
2	羽
1	徵
7	角
6	嬰徵

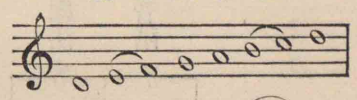
二、律旋法は、古來最も多く使用せらるゝ音階にして、近來、唱歌集に見はるるものは、皆此旋法によりて成れるものなり。

第十六章　壹越調律旋

國歌、「君が代」及び唱歌集、「橘」、「天津日嗣」等の曲は何れも壹越律旋法にてなれるものなり。

一。律旋法は、**ハ**調長音階の**ニ**より**ニ**に至る八音一列と全く同一にして、**ニ**音は壹越に相當するを以て、此音階を**壹越調律旋**と云ふ。而して此律旋を表すには、**ハ**調長音階と同一の譜を用ふ。

壹越調律旋



2 3 4 5 6 7 1 2

音階の第一音主音は之を**宮音**と云ふ。

二。壹越調律旋を基礎として、異調の律旋を構成することを得。此構成法に、順八逆六、順六逆八の二法あり。

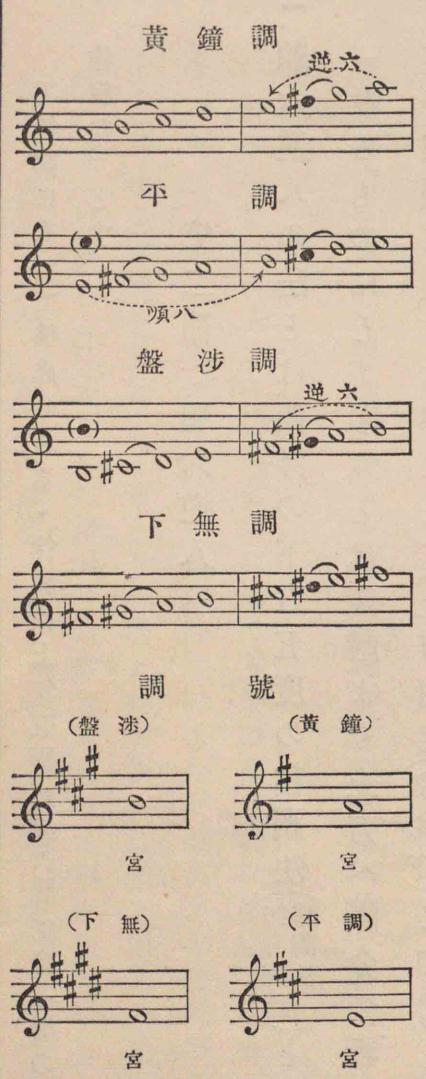
第一節　順八逆六

一。順八逆六の法とは、西洋の上方五度の移調法（即ち嬰種移調法）と同一なるものにして、順八とは壹越より上方へ斷金、平調を經て、黃鐘に至る八律にして、上方五度に相當し、逆六とは黃鐘より下方へ鳧鐘、双調を經て、平調に至る六律にして、下方四度（即ち上方五度）に相當す。

二。壹越調を基礎とし順次、移調して得たる二三の律旋を示さん。

(1) 黃鐘調　(2) 平調　(3) 盤涉調　(4) 下無調

移調法によりて、嬰記號の附くべき順序は、西洋音階の場合と全く同じきものとす。



下無調に次いで、構成せらるゝ、律旋は、上無(五嬰)、鳧鐘(六嬰)、斷金(七嬰)の三律旋なりとす。

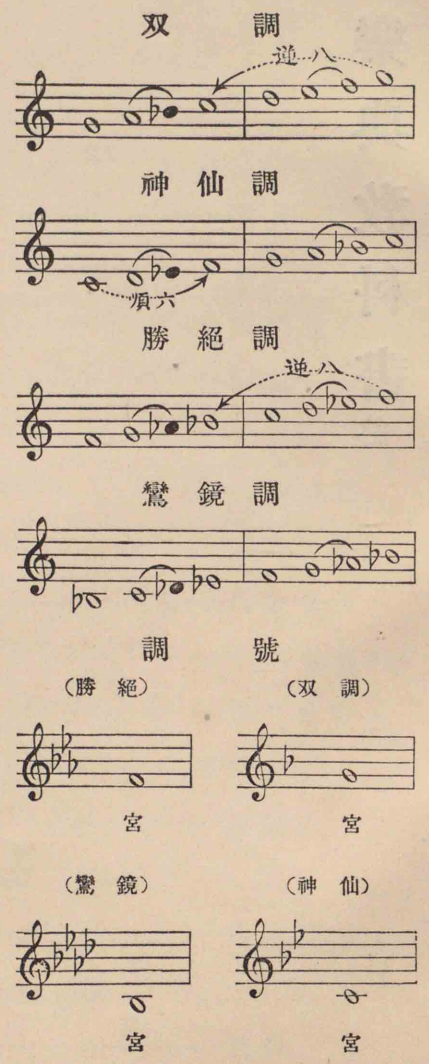
第二節　順六逆八

一、順六逆八の法とは、西洋の下方五度の移調法(即ち變種移調法)と同一なるものにして、順六とは壹越より上方へ斷金、平調を經て、双調に至る六律にして、上方四度(即ち下方五度)に相當し、逆八とは双調より下方へ下無、勝絶を經て神仙に至る八律にして、下方五度に相當す。

二、壹越調を基礎とし順次、移調して得たる二三の律旋を示さん。

(1) 双調　(2) 神仙調　(3) 勝絶調　(4) 鸞鏡調

移調法によりて、變記號の附くべき順序も亦西洋音階の場合に同じ。



鸞鏡調に次いで、構成せらるゝ、律旋は、斷金(五變)、鳧鐘(六變)、上無(七變)の三律旋なりとす。

西洋の音名は、基礎の音名七個にして、五個の變化音は嬰變の場合によりて異なる音名を有することは、前章既に說きたり。然れども、雅樂調には十二律ありて、嬰、變の場合と雖も、全く同じ律名なれば、順八逆六の場合と順六逆八の場合とに於ても、自然同一の律名を有せる律旋を生ずるものなりと知るべし。即ち斷金調は彼にありては七嬰を有し、此にありては五

變を有して、譜表上、一度の差を有すれども、鍵盤上に於ては全く同一のものなりと知るべし。鳧鐘上無の兩律旋も右と同一なる理由によりて推知することを得べし。

三、律旋法によりて成れる樂曲を唱ふには便宜上、相當調卽ち長音階の階名によりて唱ふものとす。

初等樂典教科書終

音樂術語集

第一章

Tone（トーン）……音
Interval（インターヴァル）……音程
Whole tone（ホール トーン）……全音
Half tone（ハーフ トーン）……半音

第二章

Note（ノート）……音符
General note（ゼネラル ノート）……普通音符
Simple note（シンプル ノート）……單純音符
Dotted note（ドッテッド ノート）……附點音符
Semibrave（セミブレーヴ）……全音符
Minim（ミニム）……二分音符
Crotchet（クロチェット）……四分音符
Quaver（クェーヴァー）……八分音符
Semiquaver（セミクェーヴァー）……十六分音符
Demisemiquaver（デミセミクェーヴァー）……卅二分音符
Tie（タイ）……結合線
Slur（スラー）……連結線

第三章

Rest（レスト）……休止符

第四章

Staff（スタッフ）……譜表

Line, Space. ……線, 間
Treble clef. ……高音部記號
Bass clef. ……低音部記號
Leger line. ……加線
Grand staff. ……大譜表
Key instrument. ……有鍵樂器
Organ, Piano-forte. ……風琴, 洋琴

第五章

Sharp, Flat. ……嬰, 變
Natural. ……本位
Double sharp. (—flat.) ……重嬰. (重變)

第六章

Time. (—signature.) ……拍子, (拍子記號)
Simple bar. (Double—) ……單縱線, (複縱線)
Bar. ……小節
Triplet. ……三連音符
Syncopation. ……切分音
Accent. ……强聲部
Unaccent. ……弱聲部

第七章

Scale. ……音階
Major, Minor. ……長, 短
Diatonic scale. ……全音階

Key note, (Tonic). ……主調音
Transposition. ……移調

第八章

Key signature. ……調號

第九章

Natural. ……自然的
Leading tone. ……導音
Harmonic. ……和聲的
Melodic. ……旋律的
Accidental note. ……臨時音
Relative. ……關係

第十章

Chromatic scale. ……半音階

第十一章

Diatonic interval. ……全音階的音程
Chromatic interval. ……半音階的音程
Consonant. ……協和音
Dissonant. ……不協和音
Perfect. ……完全
Augmented. ……增
Diminished. ……減
Invertion. ……轉回

明治三十六年十二月十五日印刷
明治三十六年十二月十八日發行
明治三十七年三月八日訂正再版印刷
明治三十七年三月十一日訂正再版發行

初等樂典教科書
賣價金參拾五錢

著作權所有
本書原圖ハ
轉載ヲ禁ズ
不許漢譯

著作者　山田源一郎
著作者　多梅稚
發行者　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　西野虎吉
發賣者　大阪市東區北久寶寺町四丁目百六番屋敷　三木佐助
印刷者　東京市京橋區築地三丁目十一番地　野村宗十郎
發行所　東京市小石川區小日向水道町七十三番地　東京開成館（振替貯金口座）第五參貳貳番
發行所　大阪市東區心齋橋通北久寶寺町角　大阪開成館（振替貯金口座）第貳壹六〇番

（株式會社東京築地活版製造所印刷）

第十二章

Expression（エクスプレッション）……發相
Dot（ドット）……黑點
Dash（ダッシュ）……垂點
Slur（スラー）……連結線
Pause（ポーズ）（Fermata（フエルマタ））……延長

第十三章

Abbreviation（アッブリヴイエーション）……省略記號
Da Capo（ダカポ）……反始
Fine（ファイネ）……終止

第十四章

Embellishment（エンベリッシュメント）……裝飾
Appoggiatura（アッポギアチュラ）……倚音
Acciaccatura（アクシアクカチュラ）……碎音
Trillo（トリロ）……顫音
Turn（タルン）……回音
Mordente（モルデンテ）……漣音
Arppegio（アルペジオ）……琶音

音樂術語集終

COLLECTION OF MARCHES

濟定檢省部文

粹曲行進 適用教科

纂編課樂音館成開

大形美本全二冊

錢八稅郵　錢五拾四價正　第一集

錢八稅郵　錢拾四價正　第二集

COLLECTION OF SCHOOL SONGS

濟定檢省部文

新編教育唱歌集

纂編會習講樂音育教

總布美本全一冊(本合)

錢拾貳圓壹價正

錢貳拾稅郵

VIOLIN METHOD

訂校ルケンユ、ーア

纂編課樂音館成開

ヴァイリオン教科書

濟定檢省部文

大形美本全一冊

錢拾六金價正

錢八金稅郵

ORGAN METHOD

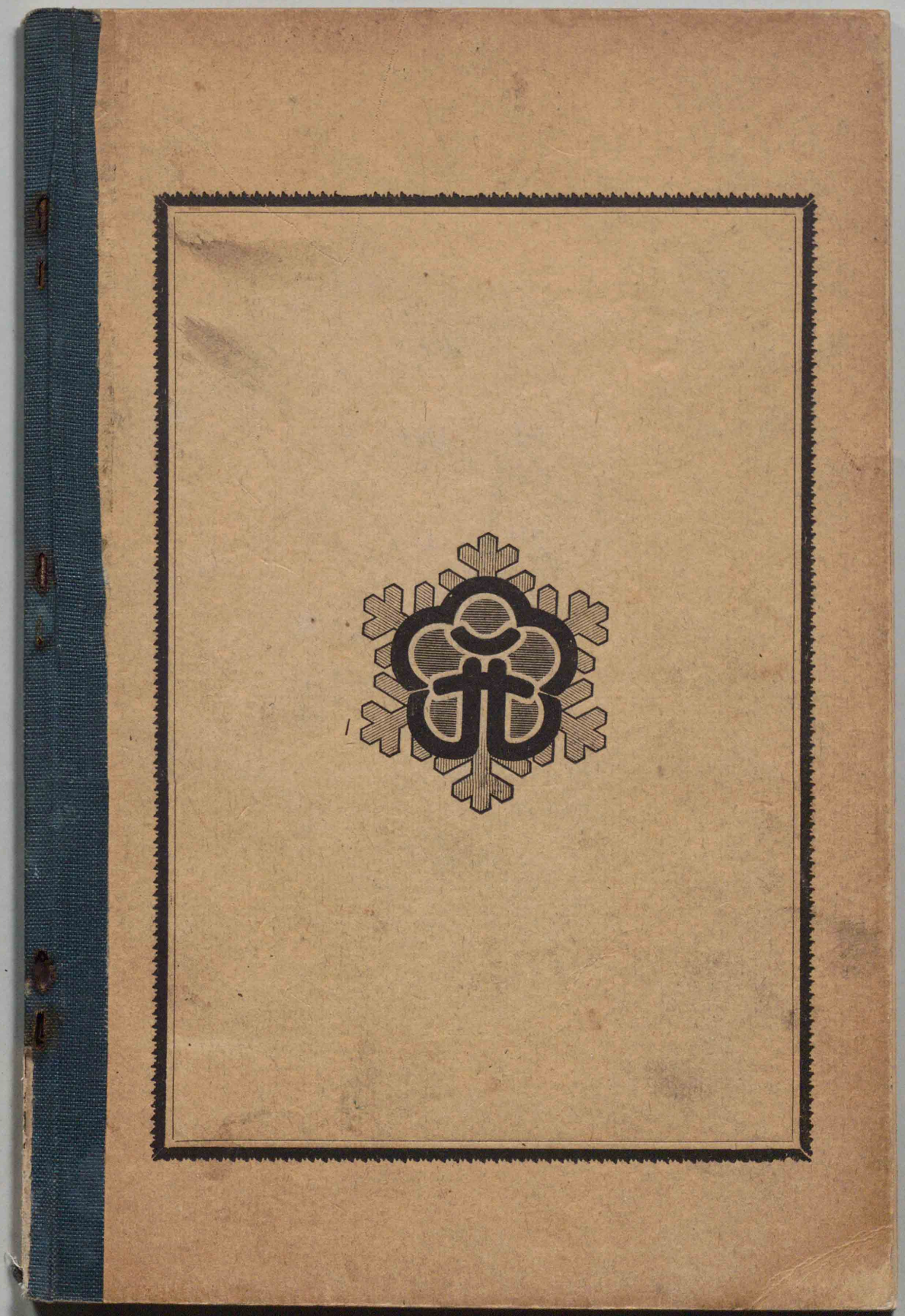
稚梅多・秀谷天

共著

初等オルガン教科書

濟定檢省部文

大形美本全一冊

錢拾五金價正

錢八金稅郵